

楽しかった修学旅行も明日でおしまい。

修学旅行が終わると高校生活の一大イベントも終わり、部活動をしていない生徒にとっては受験勉強が本格化することを意味していた。

そのためさやかをはじめほとんどの生徒は今回の修学旅行をととても楽しみにしていて、皆が思い思いに楽しんで想い出を作っていた。

「あーあ、楽しかった修学旅行も明日で終わりかあ。明日はみんなで決められたコースを回って学校に戻るだけだから、自由に遊べるのは今日が最後だね。」

「でも今日は3時から7時まで自由時間ですよ。せっかくだし私は街をぶらぶらしてカフェに行つて買い物をしたいなあ。」

「いいね！ね、さやかも一緒に行くよね？…つて、大丈夫？なんか顔色悪いけど…」

さやかは高校生活の中で親友と呼べる三人と一緒にグループを組んで修学旅行を楽しんでいた。

修学旅行は楽しい…はずなのに今は何だか気分が乗らない。

「うん…なんだかちよつと具合が悪くて…街に行くのはちよつと厳しいかな…」

「えー？さやかも一緒じゃないと楽しくないじゃん…でも、具合が悪いなら無理に付き合わせるわけにもいかないし、私も一緒にいようか？」

「えっ？そんな私なんかのために最後の自由時間を奪うわけにはいかないから、三人は楽しんできてよ。少し横になれば良くなると思うから…」

「そう？でも無理しないでね。保健の先生も一緒に来てくれてるんだし、辛いなら相談してみたらどう？」

「うん…ちよつと休むね。夕ご飯は一緒に食べようね。」

「もちろんでしょ！じゃあ、後で写真とかお話ししようね。」

「うん、楽しんできてね！」

ほとんどの生徒は最後の自由時間ということもあって、街に繰り出していった。

中にはゆっくりしたいからホテルのロビーで女子トークに花を咲かせる生徒もいれば、疲れのせいかホテルの部屋で仮眠する生徒もいた。

さやかも部屋に戻ってベッドに横たわるが、体調は悪いままで、むしろ気持ちの悪さや吐き気が少しづつ湧き上がっていた。

(このままじゃ具合悪いままだしなあ… 保健の先生に相談しようかな…)

さやかは自分の体調が悪い原因に気づいていたが、わざと気にしないようにしていた。

しかしこのままでは夕ご飯も楽しめないだろうし、親友に気を遣わせてしまうだろう…

さやかは、ベッドから起き上がると意を決して保健の先生がいるホテルの部屋に向かった。

さやかの部屋のあるフロアから一階下の一番奥の部屋が保健の先生の部屋だった。

体調不良の生徒のプライバシーに配慮してか、人目に付かない場所が保健の先生の部屋としてあてがわれていた。

さやかが保健の先生の部屋に向かうと、二名の生徒が保健の先生を待っていた。

一人目が元気そうに部屋に戻っていき、二人目も晴れ晴れした表情で部屋に戻っていくのを横目にさやかは思った。

(私にもああいうお薬くれないかなあ…)

こんにちは 「失礼します…」

「はい、こんにちは。明日で修学旅行も終わりだけれど、どうしたの？」

「えっと… 今日のお昼過ぎから具合が悪くて気持ち悪いんです…」

「そっかあ… 今日のお昼は何を食べたの？」

「班のみなんでお好み焼きとたこ焼きを食べて、その後でクレープも食べました。」

「ちよつと食べ過ぎかな(笑)。それで、お腹の具合が良くないのね？」

「はい… ちよつと吐き気もしてて…」

「それは大変ね。おトイレには行ったの？」

「はい… でも…」

「出なかったのね。旅行中で環境も変わっているし、まあすぐに出ない生徒さんもいるからねえ…でも昨日まではちゃんと出ていたんでしょ？」

「それが…」

さやかの口調が重いことから、保健の先生はさやかが今どのような症状で苦しんでいるのか、ピンときた様子だった。

「さやかさん、お通じがないんでしょう？」

「はい…」

「いつから出てないの？」

「修学旅行に来てからは一度も出てないです…」

「それじゃあ短くても5日は便秘してるわけね。普段から便秘がちなの？」

「普段は便秘なんてしないです。」

「それじゃあ苦しいでしょう…今トイレに行きたいとか、ウンチが出そうっていう感じはあ
る？」

（ウンチって…そんなにはつきり言わなくてもいいのに…）

さやかが内心では恥ずかしいと思いつつ、さやかのお腹の奥深くからさやかを苦しめている原因である大量のウンチをさすりながら、さやかは保健の先生に伝えた。

「今出そうっていう感じはしないんですけど、ホテルに戻ってきてからずっとお腹が重苦しくて、早く出て欲しいなあっていう感じですよ。」

「そっかあ…さやかさん、今すぐウンチを出してあげられるお薬があるけど、使ってみる？」

「え？ いいんですか？ はい、お願いします！」

「分かったわ。それじゃあ準備するから、誰も入ってこないように部屋の鍵を閉めてくれる？」
「はい。」

さやかが部屋の入口の鍵を閉めて部屋の中に戻ると、保健の先生から、聞きたくないと思っ
ても、予想していた言葉が飛び出した。

「それじゃあ今から洗腸かけてあげるから、スカートとパンツを脱いでお尻を出してもらっても

いいかな？」

「あの…やっぱり浣腸しないといけないんですか…？」

普段から快便のさやか浣腸を使うことは一切なく、遠い過去の記憶で、小さい頃にお母さんだつたか病院でされたことがある程度だつた。

女子の間では時々話題に上ることもあり、浣腸という医療器具があることや、浣腸を使うとどうなるかということとはさやかも分かつていた。

（「この前浣腸したんだけどマジで凄かつたよ。全然出なかつたのに一発だつたし！」「あれお腹痛くなるのが嫌なんだよね…」）

女子トークの中身を思い出しながら、さやかは保健の先生の指示に従ってスカートとパンツを下ろした。

さやかの下半身があらわになり、保健の先生が浣腸の説明を始める。

「このお薬をお尻から入れすと少しお腹が痛くなつて、ウンチが出したくなるんだけど。でも3分くらいは我慢しないと効果が出ないから、出そうになつても我慢してね。」

保健の先生のテーブルの横には浣腸の空箱が置かれており、さやかがちらつと視線を移すと【ケンエー浣腸30】と書かれていた。

「それじゃあ壁に手をついてお尻を突き出すようにしてもらえるかな。」

さやかは保健の先生の指示に従い壁に手を付き、お尻を突き出すように前屈みの姿勢をとつた。お尻の穴があらわになると、保健の先生が少しずつ近づいてくるのが空気の動きで分かつた。

「今から浣腸のお薬を入れるから、終わるまで動かないように。お口で息してね…」
すう、はあく、とさやかの口呼吸の音が静まり返つた部屋に響くと、さやかのお尻の穴に何かが進んできた。

市販の浣腸の管がさやかのお尻の中に埋められると、すぐにびゅつという感じでひんやりとした感覚がお尻の穴の近くに広がつた。

「つ、冷たい…」

「これが浣腸のお薬だから我慢してね。もうお薬全部入つたから抜くわね。」

さやかのお尻の穴から浣腸が抜き取られると、保健の先生はトイレトペーパーをさやかのお尻にあてがった。

「それじゃあ後はベッドの上で3分くらい横になって我慢すればスッキリするから。私は奥の方にいるから、出そうになったらトイレでスッキリしてね。」

保健の先生が部屋の奥のスペースに行くと、トイレがあるスペースにはさやか一人が残された。

保健の先生がいなくなつて間もなくして、さやかはお尻の穴の辺りが熱くなるのを感じた。

(何だか変な感じがする…それにウンチが出したい感じがしてきた…)

そう思った瞬間、さやかを腹痛が襲った。

(いつつ、痛いっ！何これ…こんなの…我慢なんて…できるわけないじゃん！)

さやかに浣腸が施されてからまだ1分も経っていなかった。

だが普段は快便のさやかが浣腸の最初の波に抗えるわけもなく、さやかはお尻を押さえながら一目散にトイレに駆け込んだ。

ブシャツ！ さやかがトイレにまたがった瞬間、浣腸液が吐き出された。

しかし肝心のウンチが出てくる気配は全くなかった。

10分ほどトイレで格闘したものの、次第に腹痛と便意が収まり、保健の先生に相談する前よりも、かえって欲求不満になってしまった。

(浣腸してもらったのに、ウンチが出ないなんて…)

トイレを流して部屋に戻ると保険の先生が笑顔で待っていた。

「どう？ スッキリしたでしょう。浣腸はすぐ効いてくれるからね。」

保健の先生はそう言うと、さやかの表情が晴れないのを気に掛けてか優しく話しかけてきた。

「我慢するとお腹も痛くなるし、あとは夕ご飯までゆっくりお部屋で休むといいわよ。」

「あの…先生…それが…」

「ん？ どうしたの？」

「先生に浣腸してもらったのに出なかったんです。さつきよりも苦しいし…どうしたらいいですか？」

「そっかあ… ドラッグストアの浣腸じゃ出なかったのね… う〜ん…」

保健の先生は少し考えこんで、ゆつくりと口を開いた。

「さやかさん。ドラッグストアの浣腸で出ないような便秘だと、お薬を飲んででもかえって苦しくなっちゃうの。それでね、さやかさんがイヤじゃなければホテルの近くに病院があるから、病院でお薬を出してもらった方がいいと思うんだけど… 先生と一緒に病院に行く？」

「お願いしてもいいですか… もう苦しくて辛いです。」

「それじゃあジャージに着替えてホテルの入口で待ってもらえる？ 先生もすぐに行くから。10分後でもいいかな？」

「はい…」

さやかが部屋に戻って病院に行く準備を整えるのと同時に、保健の先生も準備を進めていた。

ぶるるるる… 「はい。〇〇病院受付です。」

「もしもし、こちら△△高校の養護教諭の佐々木と申します。こちらには修学旅行で来ています。今から生徒一名をお連れしたいのですが、診察時間はまだ大丈夫でしょうか？」

「はい。まだ16時前ですので、あと2時間ほどでしたら大丈夫です。何科になりますか？」

「内科になります。」

「それでは内科のナースステーションにお繋ぎしますので、少々お待ちください。」

ブツツ… ツーツー 「お待たせしました。〇〇病院内科受付です。」

「もしもし、こちら△△高校の養護教諭の佐々木と申します。今から生徒一名をお連れしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「はい。今は比較的落ち着いていますので大丈夫かと思えます。ちなみにもどのような症状でしょうか？」

「修学旅行に来てから便秘を訴えておりまして、排便が5日以上ない状態です。」

「何かお薬は飲んでいますか？」

「飲み薬は飲んでいません。ただ先ほど市販の浣腸をかけてみたのですが排便が見られず、生徒が苦しくて辛いと言っています。お手数をおかけいたしますが治療の方をお願いできますでしょうか？」

うか？」

「分かりました。先生にも伝えておきます。ただ、苦しくて辛いということだと、先生次第ですがおそらく浣腸になると思います。」

「ええ、そうですね。よろしく願いいたします。」

「かしこまりました。ではお待ちしております。」

保健の先生が電話を終えてホテルのロビーに着くと、ジャージに着替えたさやかが待っていた。

「先生すみません！」

「いいのよ、こういう時の保健の先生なんだから。さ、夕ご飯までには元気になろうね！」

「はい…」

さやかが力なく答えると、保健の先生の運転で病院に向かった。

病院に着くと保健の先生と一緒に内科に案内され、診察室の前のベンチに腰掛けて待っている。しばらくしてさやかの名前が呼ばれた。

「さやかさん、診察室にお入りください。」

さやかが診察室に入ると、少し年配のおばあちゃんのような先生が出迎えてくれた。

いくら治療のためとはいえ、便秘であることを男性に伝えるのは恥ずかしいと思っていたので、先生が女性であることが分かったさやかの表情は少し明るくなっていた。

(よかったあ…優しそうな女の先生で…)

「さやかさんの症状についてはお電話でも伺っています。便秘で、浣腸かけても排便がなかったということですね。」

「はい。」

さやかが返事をする前に、引率の保健の先生が答える。

「念の為にお腹の様子を確認したいので、ベッドに横になってお腹を出してもらえるかしら？」
さやかはこくりと頷き、ベッドに横たわった。

ジャージをまくり上げてお腹をあらわにする。さやかのお腹に先生の聴診器が近づいてきた。

(冷たい…)

「うん、うん… お腹はきちんと動いているようね。 ちょっと押すけど、痛かったら言っつてね。」
先生の手に力が入ると、お腹の奥から何か吐き出てきそうな感じになり気持ちが悪いくらい。

先生の手がさやかさんの左下腹部に移ったとき、さやかは思わず声を上げた。

「痛いんです！ うう…」

「ごめんね。 もう分かったから大丈夫よ。 服を治してもう一度座ってもらえるかしら。」

さやかがジャージを治して椅子に腰かけると先生はゆっくりと話し始めた。

「お腹の音もきちんと聞こえていて動いているし、お腹が痛いところも便の通り道になる場所だから、便秘で間違いないでしょう。 でもここまで重症の便秘になると飲み薬を出しても効くまでに時間が掛かってかえって苦しくなっちゃうから、うちで出して帰りましょう。」

「分かりました…」

さやかが力なく返事をする、先生はそばにいた看護師さんに指示を出した。

「近藤さん。 この患者さん処置室でGEお願いします。」

「はい。 高校生ですと60ですか？」

「修学旅行に来てる患者さんだし、一度浣腸かけても出なかったみたいだから、しっかり出るようにしてあげて。」

「分かりました。」

「それじゃあ診察室の二つ隣の処置室に入ってお待ちください。 頑張つてね。」

「あの… しっかり出るようにして何されるんですか？」

「さやかさんの場合はウンチを出してあげないとお腹の具合が良くならないから、うちで浣腸して出しちゃいましょう。」

「でもさつきホテルで浣腸してもらったんですけどダメで… もう一度浣腸すれば治りますか？」

「大丈夫、 病院の浣腸だったら絶対に治るから。 頑張つてね。」

さやかは何度も「頑張つて」と言われるのが少し気になった。

しかし重く痛みも増してきたお腹の具合が良くなるのであれば「何でもいい、早くウンチを出し

てしまいたい！」その一心でさやかは処置室のドアを開けた。

処置室の中にはカーテンで囲いが作れるベッドが三つ並んでいて、処置室の奥にはもう一つ個室があった。

（何だろう、このドア…）

さやかが興味本位でドアを開くと、手すりのついたトイレで、洋式便器が一つ用意されていた。なぜ処置室の奥にトイレがあるのか、さやかは軽く考えていた。

しかし間もなく、その意味を身をもって知ることになるのだった。

こんこん… 処置室のドアがノックされた。

さやかが返事をする、先生のそばにいた看護師さんが入ってきた。

「それじゃあ今からウンチを出すためのお薬を準備してくるから、このベッドに横になって待っててね。」

「はい。」

さやかが一番奥のベッド—トイレに一番近いベッド—に横になると、看護師さんはカーテンを閉めて、カーテンの外からさやかに声をかけた。

「10分くらいで戻ってくるから、ちよつと横になってね。」

あと10分でお腹の具合が良くなる… さやかは自分に言い聞かせるように看護師さんが戻ってくるのを待っていた。

手元のスマートフォンをいじりながら待っていると、看護師さんがガサガサと音を立てながら戻ってきた。

「お待たせ。じゃあ、今から頑張ろうね。汚れるといけないから、ジャージの下とパンツはこのカゴの中に入れてね。」

さやかは無言でジャージの下を脱ぎカゴの中に入れ、ジャージの上に静かにパンツを置いた。便秘を治すためのあの治療を受け入れる瞬間が近づいていた。

「ベッドに横になるときは、左側を下にしてね…」

看護師さんがさやかの体を少しひねって左側を下にすると、さやかのぷりつとしたお尻が看護師

さんの目の前にさらされた。

(ホテルでの浣腸と全然違う…こんな格好で浣腸されるの?)

「まずウンチをするときに痛くないように、お尻にお薬塗るからね。ちよつとお尻がひんやりするけれどすぐに終わるから我慢してね。」

(うやつ?)

さやかは今までに感じたことのない違和感をお尻の穴に感じた。

看護師さんの人差し指が、さやかのお尻の穴をいじるように円を描き、更にさやかのお尻の穴の中に指が入り込んできた。

「うえっ…」

さやかが声にならない声を出すと、看護師さんはその様子を察したのか、さやかのお尻の穴から人差し指を抜き取った。

「ごめんね。これで痛くないから大丈夫よ。じゃあウンチを出してスッキリしようね。」

「お願いします。あの…ホテルでもらった時は全然出ませんでした、大丈夫ですか？」

「お店で売っている浣腸はお薬の量が少な目です。しっかり我慢ができなかったり、便秘が続いて重くなっちゃうとお店では中々効かなかったりするんだよね…でも病院の浣腸ならしっかり我慢すれば絶対に治るから頑張ろうね。」

(うっ、うっ…)

さやかがお腹の痛みと重苦しいような吐き気で涙目になると、看護師さんが優しく声を掛けてくれた。

「大丈夫よ。あと10分でスッキリ治るから。」

「すみません…もうお腹の具合が悪くて苦しくて…」

「それじゃあ今からお薬の最後の準備をするからね。」

看護師さんがさやかに背を向けると、ガーゼにゼリーを取り出した。

そして医療用のディスプレイ浣腸が入っていた袋をピリッと破ると、さやかはその瞬間が近づいているのだということを感じた。

(ホテルでされた浣腸と同じなのになんでこんなに時間がかかるんだろう…)

ふとした好奇心から、さやかはベッドに横になりながら体を起こすようにねじり、看護師さんの方を見てみた。

最初は看護師さんの背中中で隠れていたが、看護師さんがさやかの方を振り向くと看護師さんの手には何かが握られており、天井に向かって透明の管が延びていた。

そしてその管の先端はヌラヌラと部屋の明かりを反射していた。

(病院の浣腸ってずいぶん長いんだ… って… え？ これ、浣腸なの？)

「それ… 全部入れるんですか…?」

「ううん。この管は7センチくらいしか入れないから大丈夫よ。お腹の奥の方までお薬が効いてくれるように少し長目になってるけど大丈夫だから。」

さやかにとつてはお尻の穴から入ってくる管の長さも心配だったが、それ以上に心配だったのは浣腸液の容量だった。

ホテルの部屋で保健の先生が持っていた浣腸は卓球のピンポン玉くらいの大きさで、ピンク色だということも相まってかわいらしいものだった。

しかし看護師さんが手にしている「モノ」は明らかに違っていた。

「いや… その手の中にあるのがお薬ですよ… そんなに入らないですよね…」

「このお薬はウンチが出るときに一緒に出てくるから。この位なら入れても大丈夫だから。」

「だって手の中からはみ出てるじゃないですか。ホテルでされた浣腸よりずっと大きいし…」

「でもお店の浣腸で出なかった便秘だと、この位入れないとウンチが出ないから… だから頑張つてスッキリしちゃおう。すぐに終わるし、それにもう袋から出して準備しちゃったから、ね！」

さやかは無言で背中を捻りベッドに横になった。

(これでお腹の具合が良くなるなら…)

さやかはそう思いながら背中を丸めた。

意図せずともお尻の穴があらわになり、無意識の内に浣腸を受け容れる体勢になっていた。

でもそれは一刻も早くウンチを出したいというさよかの欲求のあらわれだったのかもしれない。

「それじゃあじつとしててね…」

看護師さんの言葉と同時に看護師さんの手がさやかのお尻に触れ、むにとお尻を掴まれた。と同時にさやかのお尻が少し開かれて看護師さんの前にあらわになった。

「今から管が入るからね。」

さやかのお尻の穴は既に浣腸を受け容れる態勢だったため、抵抗なく浣腸の管を受け入れた。浣腸の管が7センチほどさやかのお尻の穴に埋められると、看護師さんの手の動きが止まった。その後、看護師さんの手は浣腸液がたつぷりと入っている部分に移し替えられた。

「それじゃあ今から浣腸かけるから。口で息をしててね。」

「はい…」

はあ… すう… はあ…

「もうちよつとで液入れますよ。入れ終わるまでじつと我慢しててね。」

看護師さんはさやかにそう告げると、右手を握りしめて、少しずつグリセリン浣腸液をさやかのお尻の穴に注ぎ始めた。

蛇腹の部分が少しずつ、ゆっくりと折りたたまれると、透明な管を通ってグリセリン浣腸液がさやかのお尻の穴の中を満たしていった。ゆっくりと息をしていたさやかが、自分の中に何かが入ってきたのを感じたのは、看護師さんから声を掛けられてから10秒ほど経ってからだだった。

「あっ。」

さやかは思わず声を上げた。

今はまだ単なる「液体」がお尻の穴から入ってきているだけだった。

しかしその「液体」は次第に『便秘を治して無理矢理ウンチを出すための「お薬」に変わっていく』のだが、今はまだその本性を見せていなかった。

「今お薬入ってるからね。お腹に力が入るとお薬がうまく入っていかないから、終わるまでなるべく話さないでね。」

「はひ…」

さやかはが弱々しく答える。

めた。

間もなく、最初の波がさやかを襲った。

（うそつ、何これ！ い、痛い！ それにお腹の中が重い… ホテルでされたのよりも全然違う！）

「お腹… 痛いです… トイレ…」

「もうちよつとで浣腸終わるから我慢して。」

「ああ… お腹痛いですつ、早くしてっ！」

「最初だけ我慢したらウンチが出てくれるから、もうちよつとだけ頑張っ！」

さやかの口呼吸の音が少しずつ荒く、大きくなっていった。

「はあ、はあ、痛いいい…」

浣腸が始まって1分ほど経って、容器は看護師さんの手でようやく折りたたまれ、同時に蛇腹にたつぷりと入っていたグリセリン浣腸液が全部さやかのお尻の穴に注がれた。

「はい。それじゃあ浣腸かけ終わったから抜くね。ちよつとだけお尻の穴に力を入れてね。」

看護師さんはさやかのお尻の穴がきゅつと閉まったのを確認すると、トイレットペーパーを当てがって静かに管を抜き取った。

「それじゃあ今からできるだけ我慢してからトイレに行ってね。」

「が、我慢つてどのくらいですか…？」

「できれば5分頑張ってもらいたいけど、頑張れそう？」

「5分… それくらいなら… でも… もう出そうです！」

「今はお薬が入った刺激で出したいだけだから少ししたら収まるから。」

看護師さんの手がさやかのお尻の穴を押えているおかげで、最初の便意は収まった。

だが間もなく第二波がさやかに襲い掛かった。

それは、最初の波よりも大きく、確実なものだった。

ぐるるるゝ ぎゅぼっ…

（さつきよりもお腹痛い！）

「お腹… 痛いです… あと何分ですか!？」

「今1分ちよつとだから。あと4分我慢してね。」

「あ…あと4分なんて絶対無理です！もうトイレに行きたいですっ！」

「こうやって押さえているから頑張って我慢して。そうしないと浣腸のお薬が効かなくてウンチが出ないよ。」

「こんなにお腹痛くて出したいのにまだダメなんですか？」

さやかは看護師さんにお尻の穴を押えられながらベッドに横たわっていた。

最初はじつと耐えることができていた。

しかしグリセリン浣腸液の効果が発揮されるにつれ、お腹の違和感から体をよじるようにモジモジとしていたのが、迫りくる便意に必死に耐えようと足をバタバタし始めた。

「痛い痛い…お腹、痛い痛い…」

「お薬が効いている証拠よ。もうちよつとだから、ね。」

「ううう…ごめんなさい…！もうウンチしたいです！」

看護師さんが無言でさやかのお尻の穴を押え初めてから2分ほどが経過した頃だった。

さやかの腸内に注がれた150ccものグリセリン浣腸液が三度さやかを襲った。

三度目の波だから、その効果はとても強烈だった。

普段便秘がちではないさやかに間もなく限界が訪れようとしていた。

（あああ…ああ…もう無理い…）

「お願いですからウンチ出させて下さい！」

さやかのお尻の穴がひくひくと小刻みに動き、時折トイレットペーパーにグリセリン浣腸液が滲み出てくるのが看護師さんにも明らかだった。

（トイレまでは10秒くらいで行けるけど、これ以上我慢させたら失禁しかねないわね。 150

ccの浣腸だし、十分頑張ったから大丈夫ね。）

「よく頑張ったね。ゆつくり立てそう？」

「はい…今すぐトイレでウンチしたいです！」

さやかは恥じらいも忘れて、大きな声で「ウンチ」と叫んでいた。

150ccものグリセリン浣腸を施されたのだから無理もなかった。

「それじゃあトイレで頑張つてね。」

「・・・」

さやかは無言で頷き、左手でお尻の穴を、右手でお腹を抱え込むように中腰でゆっくりとトイレに向かった。

(こんなに近くなのに何でこんなに遠く感じるの：お願いだから持つてね：)

さやかがやつとの思いでトイレにたどり着くと、鍵をかけるのも忘れてトイレに腰掛けた。

その瞬間、さやかのお尻の穴から勢いよく浣腸液が吐き出された。

ブバババアツツ： ブジュツ： ブシユツ：

(イヤっ、恥ずかしい：こんなに大きな音が出てくるなんて：)

ポトポトポトツ： ビチビチ： ミチイイ：

さやかのお尻の穴からとめどなくウンチが吐き出された。

長期間の便秘とはいえ、幸いお尻の穴を塞いでいたウンチの塊がそれほど大きくなかったためか、グリセリン浣腸液が吐き出されるのと一緒にさやかを苦しめていたウンチも出てきた。

(こんなに出てくるの：？でも：まだ出したい！)

さやかが下腹部に力を入れると、これほどかと言わんばかりの量のウンチが、小刻みに産み落とされた。

何回お腹に力を入れただろうか：トイレにこもって15分ほどでやつと腹痛と便意が収まった。トイレットペーパーでお尻を拭いて流そうとしたとき、さやかは我に返った。

(こんなに：ウンでしょ：イヤっ：恥ずかしいよお：)

さやかは何事もなかったようにトイレを流し、処置室に戻ると下着を整えた。

「お疲れ様。頑張ったわね。もうお腹の具合は大丈夫かな？」

「すみません：」

「いいのよ、謝らなくても。病院は具合が悪いのを治すためにあるんだから。でも今日はあまり無理をしないでゆっくりとしていた方がいいかな。」

「はい、ありがとうございます。」

浣腸処置を終え、病院のロビーに戻ると保健の先生が待っていた。

「どう？ 具合はよくなった？」

「はい。あの…先生。このことなんですけど…」

さやかはうつむき加減で保健の先生に小声で伝えた。

「クラスみんなには内緒にしてもらえますか？」

「もちろんよ。さ、ホテルに戻りましょ。」

ホテルに戻ると、間もなくして三人が買い物から戻ってきた。

「さやかも一緒に来たらよかったのに！」

「具合はもういいの？ さつきよりも顔色は大分いいかな。」

「夜ごはんもみんなで食べようね！」

この数時間の間にさやかに何が起こったのかを知っているのは保健の先生だけだった。

そして、さやかは何事もなかったように気丈に振舞った。

「ごめんね、ちよつと休んだらだいぶ良くなったから…」

（浣腸されたなんて絶対に言えない。でも浣腸のおかげでお腹の具合が良くなったんだから、少しは浣腸に感謝しないといけないかな…）

二度と浣腸をされないように気を付けよう…さやかはそう思いながら四人でホテルの部屋に戻っていった。